

ドナウ の 四季

2010年・春季号・No.6

日本・ハンガリー交流年2009	伊藤 哲雄	1
「眼からうろこ」の独創的な体制転換論	木村 汎	2
新しい歌を主に向かって歌え	中山 弘正	3
転換20年を経て本格的な体制転換論	佐藤 経明	4
ゲーム理論で読み解く	倉林 義正	6
著者への私信	川上 忠雄	8
運動サークル情報		9
「こちらはJ-CATの××さんです」	青木 都美子	10
留学生自己紹介		11
門野 由奈・山野井 茜・斎藤 択未・森 隆真・竹田麻子		
緑の丘日本語補習学校	越野 絵美	14
コンサート情報	桑名 一恵	15
金子三勇士君コンサートの感想		16
お知らせ		



コルナイが綴る 20 世紀中欧の歴史証言

1928年に生まれたハンガリーの経済学者コルナイの自伝。
第二次大戦後の社会主義計画経済から現在までのライフストーリー。

「週刊ダイヤモンド」2006年ベスト経済書第9位にランクイン コルナイ・ヤーノシュ自伝

— 思索する力を得てコルナイ・ヤーノシュ【著】 盛田常夫【訳】
◆好評発売中! ◆定価 4935 円 (税込) ◆A 5 判 / ISBN 4-535-55473-0 ◆日本評論社



体制転換 の経済学

黄色の教科書シリーズで知られる専門学部の定番テキスト。体制転換の理論と転換直後の現状を分析。各大学で教科書として使用。

盛田常夫著

第一部 社会主義経済の失敗

社会主義崩壊をもたらした社会的退化への論理を構築。交換経済と再分配経済の比較分析に新たな視点を提供。

第二部 ポスト社会主義経済

体制転換の過渡期の問題をすべて取り上げ、解決の道筋を示す。地域による体制転換の違いを解明。

■新世社 新経済学ライブラリー20 定価2781円(税込)

なぜハンガリーは独創的な科学者を輩出したのか

20 世紀を創ったハンガリー人 マルクス・ジョルジュ [著] 盛田常夫 [編訳]

■ 定価 3045 円 (税込) A 5 判
■ ISBN 4-535-78331-4

異星人伝説

ハンガリーは 20 世紀の科学の発展に貢献した多くの頭脳を輩出した。なぜなのか。大きな足跡を残したハンガリー出身の科学者たちの生い立ちからその到達点までを描いた評伝。

体制転換20年の歴史的・理論的総括の書

ポスト社会主義の政治経済学

体制転換20年のハンガリー：旧体制の変化と継続

■ 2010年1月中旬発売 日本評論社 定価3800円

盛田 常夫著

新しい概念を駆使して、体制転換以後の中欧社会の状況を分析。体制転換の社会哲学から経済システム、政治体制、社会動向、イデオロギーにいたるまで、社会経済の全般を捉える。



日本・ハンガリー交流年2009

日本国特命全権大使 伊藤 哲雄

昨年は、日・ハンガリー国交樹立140周年、及び戦後の外交関係再開50周年にあたり、「日本・ハンガリー交流年2009」と銘打って、両国の各地で様々な記念行事が催された。ここハンガリーでは、百を超える数の周年認定行事が開催され、芸術・文化を通して、ハンガリーの方々に日本への理解と関心を大いに高めて貰うことができた。また、この交流年のそれぞれの名誉総裁である秋篠宮殿下とハンガリーのショーヨム大統領が、相互に相手国を訪問するというハイレベルの人的交流も実現した。そこで、この誌面をお借りして、両国関係の歴史に残るこの年のハンガリーでの主な出来事について、在留邦人の方々に紹介し、記録に留めることとしたい。

なお、私がブダペストに着任したのは昨年9月なので、それ以前の行事については、広報文化班長の高水英郎書記官(当時・本年3月帰国)を初めとする大使館員からの情報・報告に基づいて記述したものである。

交流年は、1月の麻生・ジュルチャーニ両国首相の祝賀メッセージ交換で幕が切られた。そして、こけら落としは、1月の和太鼓ユニット「ようそろ」の公演であった。和太鼓に津軽三味線と篠笛が加わった独特な邦楽の響きは、リスト音楽院大ホールを埋め尽くしたハンガリー人観客を魅了し、周年は順調にスタートした。そして2月には、新しく始まった「日本文化発信プログラム」(JCAT)により日本から派遣された7人のボランティアが、ハンガリー各地で日本語教育及び日本文化紹介の活動を開始し、記念すべき年に、また一つ友好交流の担い手が加わることとなった。この友好ムードを更に高めたのが、4月の「裏千家千玄室大宗匠茶道行事」である。千利休から数えて15代の裏千家家元にして裏千家の現総帥である千玄室大宗匠は、ハンガリーでも広く知られており、周年を祝いショーヨム大統領やシリ国会議長に呈茶を行なった他、エトウヴェシ・ローランド大学で茶道講話とお手前の披露を行った。会場となった同大学の講堂は、臨時席を作る程の超満員で、ハンガリーの観客は、奥深い茶道の世界に触れる貴重な機会に、皆、満足し

様子であった。

5月には、秋篠宮同妃両殿下をハンガリーにお迎えした。これまで、2007年7月に天皇后陛下が公式訪問された他、85年4月には英国御修学中の皇太子殿下が、また94年11月には高円宮同妃両殿下が訪問されており、我が国の皇室はハンガリーとご縁が深い。当地滞在中、秋篠宮殿下は、大統領ほか当国要人と懇談された他、周年事業の一つである「W A - 現代日本のデザインと調和の精神」展を御覧になり、また、自然科学や家禽類の博識者として、動物園や農業博物館を訪問され、更に足を延ばされて、ブガツ市で灰色牛を視察された。こうして多忙なスケジュールをこなされる中、各地でハンガリーの人々と親しく接し、見事な皇室外交を展開された。

8月には、有名なスイゲト野外フェスティバルで、愛知県の伝統芸能使節団が獅子舞や棒の手と呼ばれる伝統芸能を披露する等、夏も周年行事はハンガリー各地で続けられ、どのプログラムも好評を博した。そんな周年のまっただ中の9月に、私は東京からブダペストに着任した。私が最初に出席した周年事業は、9月下旬の武蔵野音楽大学管弦楽団の演奏会であり、場所は、周年オープニングの会場ともなったリスト音楽院の大ホールだった。リスト音楽院は、当国最高の音楽教育機関で、50名以上の日本人音楽留学生を受け入れている他、周年行事を含め文化行事の開催では日本大使館に多大な協力をしてくれている。この大ホールが、昨年11月より改修工事のため2年間ほど使えなくなったことは残念である。

また、10月には、周年を記念して、日・ハ両国共同で記念切手が発行された。デザインは、ハンガリーのヘレンド磁器、マチョー刺繍、エリザベート橋、日本の刺繍や茶壺に富士山と、どれも皆素晴らしい図柄である。額面も260フォリントで、日本への絵はがきに貼るのに丁度良いことも人気を博したようだ。

「ブダペストの日」でもある11月17日、エリザベート橋の点灯式典が行われた。この橋のライトアップ・プロジェクトは、日本で組織された周年の実行委員会(会長:河野

洋平前衆議院議長)が、ブダペスト市と協力しながら進めてきた周年行事の目玉である。既に夜間照明が施されているドナウ川の鎖橋や自由橋に挟まれ、それまで通常の街灯だけで暗かったエリザベート橋が、石井幹子照明デザイナーの設計でライト・アップされ、世界遺産のブダペスト中心部の夜景が、訪れる旅行者の目に一層魅力的になった。同日夕刻、ドナウ川に浮かぶジョフィア号の船上で行われた式典には、実行委員会のメンバーである河野前議長や米倉弘昌住友化学会長(次期経団連会長)、石井デザイナーに加え、日本から田中義具理事長初め日・ハ友好協会のメンバーも沢山出席した。橋のペスト側の袂に埋め込まれたプレートには、日、英、ハンガリー3カ国語で、このプロジェクトが日本の実行委員会とブダペスト市の協力で実現したことが明記されており、このライト・アップの完成により、エリザベート橋は、未来永劫に日・ハンガリー両国の友好を象徴する架け橋として生まれ変わった。

2009年周年締め括り行事は、11月末の新内浄瑠璃と八王子車人形の共同公演であった。本格的な日本の古典舞台芸能にハンガリー人の観客は目を凝らして見入っていたが、公演の最後に、ハンガリー民族衣装に扮した車人形がハンガリー舞踊を巧みに舞う姿は、観客の感動と笑いを誘い、ハンガリーでの周年の最後を飾るに相応しい友好ムードを醸し出した。

12月初め、ショーヨム大統領が訪日され、私も、その訪日日程に同行する機会に恵まれた。天皇陛下及び鳩山総理を始めとする日本の要人との表敬・会談を済ませた後、自然環境保護に関心が高く、また、山歩きが趣味で健脚で有名な大統領は、富士山近辺を散策された。当日は温かく日本晴れで、富士山も終日その美しい姿を見せて大統領を歓迎した。こうして、10年振りとなったハンガリー大統領の訪日は、無事成功裏に終わり、周年行事の歴史的フィナーレとなった。(周年行事については、大使館のホームページwww.hu.emb-japan.go.jp/2009/・館員日誌www.hu.emb-japan.go.jp/jpn/annai/diary.htmも是非ご覧下さい。)

「眼からうろこ」の独創的な体制転換論

木村 汎

盛田常夫氏の最新刊を読んだ。『ポスト社会主義の政治経済学—体制転換20年のハンガリー：旧体制の変化と継統一』（東京・日本評論社、2010年、3800円）である。まる3日間かかった。中身が余りに濃いので、速読傾向のある私ですら、途中で咀嚼するために暫し書物を閉じて思索する時間が必要不可欠だったからだ。なにしろ、ヤーノシュ・コルナイ、ジョン・ナッシュといったノーベル経済学賞に輝くハンガリーの天才たちの業績の解説に正面から取り組んでいるのだから、堪らない。経済学にまったくの素人である私は、そう簡単にページ数を繰れなかった。

もともと、盛田氏の文章は明晰で、実に分かりやすい。おそらくその理由のひとつは、本書の大部分がまず外国語（ハンガリー語）で書かれたからだろう。日本語独特の曖昧模糊として結局何をいつているのか皆目分からない文章は、只の一つもなかった。

また、最近の日本人の若手経済学者にありがちな統計、グラフ、図表ばかりを頻用する一方、そのポイントを文章で説明する作業をおろそかにする類の過度の数字依存癖は、本書に全く見られない。もとより氏は2〜3数表を挙げている。しかし、それは本文で述べたことの傍証として掲載されているにすぎない。旧文学青年と自称する私は、この点にもすっかり好感を抱いた。

私が最も感心したのは、盛田氏の独創的なネーミング能力である。例えば、ハンガリー経済を「借り物経済」または「他力本願経済」と断じ、その「キリギリス化現象」、「ゲスターワーカー現象」を指摘し、「国庫資本主義」とみなす…などなど。

私は、ロシア政治を専攻する日本人である。上記のような卓抜なネーミングを用いて行なう盛田氏のハンガリーにおける配分から交換への体制転換の分析は、同じく転換期にあるロシアはもちろんのこと、部分的には自民党から民主党への政権交代を行った現日本にすら適用可能な普遍性をもつと思った。

以下、ロシア専攻の私が膝を叩いて同感した点を1〜2、記す。

第1に、盛田氏は、社会主義経済が「計画経済」であり、体制転換を「計画から市場

への移行」と説く通説に疑義を唱える。私は経済学にかんしては無知な人間であるが、何千万点以上におよぶ物価や複雑な国民経済の仕組みをどうすれば中央政府が合理的に決定したり管理したりできるのだろうか、との疑問を長年いだいていた。したがって、盛田氏の次のような文章を見出したときに、快哉を叫んだ。「コンピュータもない時代に、(そのようなことは)不可能である」。社会主義経済と称するものの実態は、「第2次世界大戦で各国が利用した戦時的配給システムと本質的に変わらない」。

第2に、盛田氏は通説を批判するだけに止まらず、それに代る自らの見解を提起する。氏によれば、社会主義社会の自己崩壊は、計画システムの放棄というよりも配給（配給）システムの放棄だった。したがって体制転換とは、国民経済の基本的機能を「配分から交換」システムへと転換することにある。

第3に、盛田氏は、政治、経済、社会を現実に担う者が生身(なまみ)の人間であることを充分理解している。どうやら氏においては文学、映画、美術、音楽の鑑賞はたんなる趣味程度のものではなく、人間にたいする深い好奇心にもとづいているようだ。たとえ社会体制は一晩で変わろうとも、人々の意識、思考、行動様式は一夜にしては変わらない。徐々にしか変化しない。つまり、制度の転換とそれを担う人間の転換との間には、タイムラグが生じる。そこに、変化と継続という問題が生じる。

盛田氏が本書で述べていることは、たんにハンガリーばかりではなく、中・東欧のほとんどすべての国、そしてソ連／ロシアに当てはまる。もとより、ロシア経済が中・東欧諸国と異なるのは、ロシアが世界1〜2位のエネルギー資源大国であること。国際的な原油価格の高騰の追い風を受けて、プーチン主義下のロシアは約8〜10年間にわたって奇蹟的な経済発展に浴した。ところが、2008年末以来の世界的な金融・経済危機に直面して、ロシアは経済的に最も深刻な打撃を受けた国となった。それらの諸点にかんがみ、盛田氏の分析のひとつひとつはロシア専攻の私にとり実に有益であった。

例えば、プーチン - メドベージェフの二人からなるタンデム(双頭)政権は、ロシア産業構造を資源一元主義から多様化することを唱導しているものの、一向に成功していない。私が思わず膝を打ち、下線を引いた本書の21頁の次の一文を、彼らは熟読すべきだろう。「単純化への転換は比較的速く達成できるが、複雑化への転換は比較にならないほどの時間がかかる」。

とりわけメドベージェフ大統領が昨年秋以来唱えているロシア経済の近代化のスローガンは、その達成方法としてイノベーション(技術革新)を掲げ、それが自国では到底期待薄なので先進西欧諸国から「カネ、知識、テクノロジー」(メドベージェフ)の導入に求めるべし、と公然と説く。これこそは、盛田氏がハンガリーについて批判する「他力本願」思想または「借り物」経済に他ならない。先進西欧諸国からの技術移入はたしかに即時効果こそあげうるかもしれない。しかしそれが国民経済にしっかりと根付くためには、その技術を生み出すにいたった発想自体を学び、それを我が物にしようとする地道な努力が伴わなければならない。さもなければ、ロシアもハンガリーも、何時まで経っても資金と技術の輸入国に止まり、自国の近代化を完成しえないこととなろう。

もし盛田氏の本書に只1つ瑕疵、あるいは正確にいうと読者からの希望があるとすれば、それは本書が論文集であること。もちろん過去にハンガリー語で書かれたものを単に日本語へと翻訳したものではない。日本の読者向けに立派に再編成されている。とはいえ、各章には文章の固さ、柔らかさにかんして若干の差がみられるし、似たような小見出し(例—社会転換のアポリア、体制転換のアポリア)もある。また、経済、政治、社会の章が一貫して整理されていず、扱っている時期も前後することがある。著者の百科事典的な博識、何よりも精力的な知的能力を十分熟知しているだけに、これまでの書物同様次作は是非全文書き下ろしの書物にしていきたいと思う。

(きむら・ひろし 北海道大学名誉教授、国際日本文化研究センター名誉教授、拓殖大学客員教授)

新しい歌を主に向かつて歌え。全地よ、主に向かつて歌え。

主に向かつて歌い、御名をたたえよ。詩篇96:1-2

2010年2月1日

頌 主

新年もどうぞよろしく願い申し上げます。新年にふさわしい、立派な御著書『ポスト社会主義の政治経済学』をお贈りいただき、恐縮し、感謝いたしました。新年のフレッシュな気持ちで、じっくり拝読させていただき、1月末に読了いたしました。

今回も驚嘆しつつ読んだことの一つは、著者の語学力です。いろいろな場面での論争、提言等々、御地ではまったく御地の方々と同等に処しておられるという、そのことです。本当に敬意を表します。

そして、内容的な面での、多面的でキメの細かい分析力です。例えば、経済システム、政治システム、社会分析、イデオロギーと、いろいろな角度からアプローチがあり、全体として読者が立体的にイメージをもつことができるように論じられています。

読了して強く心に残り、納得しているのは、ソ連などでやってきた「計画経済」なるものが、実は「計画経済」とは全く異なり、ただの政治権力による配分だったという点です。本当に「計画経済」というものが、実際にあり得るのか。この問題は大変だなと考えさせられました。

さらに、戦後のハンガリーの政治・社会構造が、自分の想像以上に複雑で困難な内容のものであったということです。大戦中のモスクワへの亡命者たちとそうでない人々との複雑な関係が、日本の左翼にもあったのは知っていましたが、ハンガリーでは政権党にならなければいろいろあったんだ、ということを知りました。

また、ハンガリー事件とチェコ事件の際も強く印象に残りました。56年と68年とで、ほとんど「同じ情況」かと何となく思っていたのです。ポーランド、チェコは行ったことが何度かあるのですが、それ以外の「東欧」は実はほとんど行ってないのです。ハンガリーも含めて。

さらに、日本の「靖国」問題がときどき言及されている(103頁)のも関心をもちました。「靖国国営化」に反対する小さな市民運動に、もう40年以上かかっているものですから。

最後の方で、塩原君も出てきて、あれ一と思いましたが(202頁)。私も彼とはじめて会ったのは「朝日新聞」のモスクワ支局だったので。彼もよく仕事をしますね。明治学院の国際平和研究所の『PRIME』誌の今度の号(第31号)に、彼のロシア軍事を論じたものの私の書評がです。その号には、「敗戦50年」の明治学院の戦争責任告白のことをめぐる座談会も載る予定です。第30号の抜刷りと、小さい詩誌(家内が詩人で、新しい同人誌をだしはじめたので、私は詩人ではないが、応援で加わりました)を、御礼として同封させていただきます。

いっそうの御活躍を!! くれぐれもお元気で。

中山 弘正

(なかやま・ひろまさ 明治学院大学名誉教授、元明治学院長)

日本経済新聞

2010年(平成22年)3月21日(日曜日)

読書

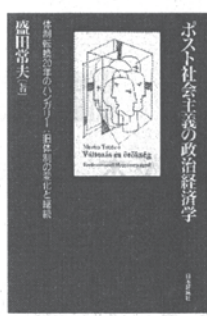
ポスト社会主義の政治経済学

盛田 常夫著

冷戦時代の社会主義国は計画経済とは言えず、粗雑な物資配給制にすぎなかった。一党独裁下で個人の創意や企業家精神は無意味であり、権力への追従が生活の保証だったから、内在的な経済発展の弾みも欠けていた。冷戦後の変化は経済システムの移行ではなく、非連続的な転換と呼ぶべきだ。転換の過程では、所有権の移転よりも多国籍企業による直接投資のほうが重要な役割を果たした。

長年にわたりハンガリーを中心に現地で経済動向を見つけてきた著者の主張は明快である。過去20年の中で中・東欧はどう変わったか、旧体制以来の病弊は何か、新たにどんな矛盾が生じているかを、本書は多くの逸話を交えて説く。

冷戦終結直後には、企業を民営化すれば市場が機能するという思い込みが目立った。しかし、ロシアやチェコのようにクレーボン方式で国営企業株式を国民に配分して



（日本評論社・3800円）
▼もりた・つねお 47年生まれ。法政大教授などを経て、立山科学グループ・ハンガリー1研究所社長。

冷戦後の変化と問題を明快に

も、すぐには活性化しなかった。国内に資本蓄積がなかったうえに、所有権を移すだけでは技術や経営の革新は進まないからだ。実際に革新の原動力になったのは直接投資である。だが、輸出の大半は多国籍企業が担い、輸入の多くも外資による部品の輸入だ。自国による付加価値のほとんどは賃労働の部分にすぎない。これでは国民経済ではなく、「借り物の経済」と著者は言う。

過渡期には国家や党の資産の略奪ともいえる動きが広がった。その後、ロシアでは略奪を糾弾するプーチン政権下で産業の再国有化が進み、「国家資本主義」の体制になっていった。一方、ハンガリーでは生産部門が資本主義化された半面、バラマキ政策で膨らんだ財政が配分を規定する「国庫資本主義」の棟相を強めた。

こうした変化の中で、とりあえず経済的利益を得たのは、旧体制以来の若手エリートや権力に近いインサイダーだ。非効率な役所仕事や労働者の欠勤率の高さなどは相変わらずだし、一党独裁からポピュリズム型選挙政治に変わった政治も多く問題をはらむ。

今回の金融危機で、旧共産圏諸国はさまざまな矛盾や弱点が露呈している。これからの改革が必要かも含め、示唆に富む本だ。

論説副委員長 脇祐三

日本経済新聞書評

書評

[書評] 転換20年を経て本格的な体制転換論 — 盛田常夫『ポスト社会主義の政治経済学』を評す 佐藤 経明

旧ソ連・東欧諸国における体制転換から20年を経て、この過程を再検証しようとする意欲的な著作がようやく現れるようになった。本書はその第一に指を屈するべきものである。「体制転換20年」が2008-09年の世界金融危機と時間的に一致したことは、これまでのアプローチに反省を促す契機ともなったが、本書のように著者の「持論」を集大成したものにも光が当たることになったことは、まことに喜ばしい。

ハンガリーには体制転換前にも後にも、他の東欧諸国と区別される若干の特徴があった。第一は、筆者(以後「私」という平たい言葉を使う)が「ドナウの四季」連載の「回想」でも触れたことだが「ハンガリー動乱」(1956年)後、1963年に始まる「宥和政策」(市民社会との『妥協』)によりハンガリーは永らく東欧で唯一「陽の当たる島」とされて来たことである。盛田さんが本書でも指摘されているように、ソ連の「傀儡政権」として出発したカーダール政権は漸次、「実体的正統性」(私は「事後的正統性」という用語を使ってきたが)を獲得することになった。これは他国にはまず見られないことである。

第二に、体制転換初期に他の多数の国と異なり、いわゆる「ショック療法」を取らず「漸進主義」に近いアプローチを取ったことだ。このため初期には皮相な観察者から「ポーランドはショック療法で成功しているが、ハンガリーは失敗している」といった藪駈みの批判を受けることになった。

ところが第三に、ハンガリーが外資依存「売り渡し」方式の民営化で産業構造を更新、90年代後半から外資企業による輸出主導型高成長を開始すると、今度は体制転換「先進国」として高い評価を受けるようになった。本書で分析されている「変化と継続」と現在のハンガリーの経済危機には、上記の「サクセス・ストーリー」が「裏目」に出たようなところがある。

多彩な本書から重要な論点をピックアップするのは容易ではないが、まず冒頭に「計画から市場へ」という『在来型』の『移行論』にたいする強い異議申し立てがある。現実存在したのは行政的な「資源配分システム」であり、とてものこと「計画経済」と言えるようなものではなかった。だから転換の本質は、「配分から交換」への「システム転換」ということになる。それはまた「戦時社会主義」と言えるものでもあったが、「平時社会主義」への転換はついに成し遂げることなしに終わった。私もまたこの「社会主義」経済を第二次大戦中のわが国で企画院が立案した「物動型」戦時統制経済と基本的に同一と考えて来たから、著者の理解とほとんど一致する。

ただ、ここで一つだけ付け加えるならば、資本主義の戦時統制経済での「雇用の自由」の極端な制限(わが国では「白紙召集」と呼ばれた「徴用」など)は、戦時の一時的なものだが、『社会主義』では国家が「全般的な雇用主」となるから「恒常化」することである。自分の労働力を処分する「人格的自由」が失われるという意味でも、「社会主義」は資本主義に較べて「後退」した社会であったのだ。

著者は「社会主義」に「内在的」な発展のメカニズムが無かったことを厳しく指摘している。フランスの哲学者、ベルグソンのいう「エラン・ヴィタール」(「生の飛躍」)があるべくも無かったことは、この点からも明らかだ。崩壊したのはこういう「経済社会」だから、著者がこれを「朽ちた樹木」のような「自己崩壊」としているのは、全く正しい。その意味では「資本主義の勝利」という一般的な見方には、若干の保留が必要だろう。

著者はまた体制転換の『イデオロギー』は無かった、という。確かに「明示的」には無かったが、実際にはアングロサクソン型の自由市場資本主義が「黙示的」には自明のイデオロギーとされていたのではなかったか。”Full-fledged Market Economy” という言葉が、何か甘い、憧れを込めた用語として常用されていたことを思い出す。レーガノミックス・サッチャリズムに象徴される新自由主義がピークに達していた80年代末に体制転換が開始されたのは、「不幸な時間的一致」だったとは、私も何度か書いて来たことだった。これがもし、金融危機に世界が震撼した20年後だったらどうだったか、と考えてみたら分かり易いのではないか。

世論が情動的に動いた時、抗し難い力を持つことでは近年、わが国でも少なからぬ苦い経験がある。当時の東欧諸国もその例に漏れなかった。自由市場経済の大合唱の前には、冷静な議論は全く非力だった。批判的な意見を留保していた専門家たちも、多少とも「スネに傷」無しとしなかったから沈黙せざるを得なかった。「市場経済移行」を助言するIMFなど国際金融機関や「アドバイザー」たちの重石も、のしかかっていた。少し厳しく言えば、「言論の自由」は無かったに等しい。私の旧友、坂元晃平(元・東レ副社長)は、財界視察団でこの時期に東欧諸国を訪れた印象を私家版の歌集に「ざれ歌」で書き残している。

「見えざる手」働き始めししるしとや カジノもできたマフィアもできた 計画へのアレルギーは分かるけど 産業政策要るんじゃないの ひな鳥の巣立ちにも似てこの国も お口揃えてプライベートイション

だが、盛田さんが厳しく書いているように、この「ひな鳥」は決して『純真』ではなかった。著者が「ポスト社会主義のイデオロギー」で論難している「ネオ・リベラリズム」の横行も、いわばその『続き』である。ただし、著者の批判はあくまで具体的で、「原理論」から直ちに健康保険の「一挙

民営化」のような「政策論」を引き出すことの誤りが弾劾される。ここでは著者とも私とも親しかった80年代の改革派、パウエル・タマーシュの名前も出て来て、往年の改革派イデオログの「変貌」が良く分かる。ここで立ち入る余裕は無いけれども、理論-政策論のからみでコルナイを批判(28-29ページ)しているのは、誠に正鵠を射ている。

冒頭に転換前後のハンガリーのサクセス・ストーリーが「裏目」に出たというのは、かなり複雑で多面的な問題である。カーダールの宥和政策で四分の一世紀もの「社会的平和」が保たれ、政権が「実体的正統性」を獲得した反面、体制転換が曖昧とされ、旧体制下のエリート層とその行動様式だった「オポチュニズム」が転換後も殆ど手付かずに生き残り、本書で縦横無尽に批判されている転換後の腐敗や汚職の源泉となった。このあたりの分析は極めて生彩に富んでいる。

他方、外資売り渡し方式の民営化は、資本・経営・技術という旧社会主義諸国が直面した難問を一挙に解決してくれる「打ち出の小槌」のように見えた。ハンガリーの生産回復はポーランドよりは遅れたが、90年代後半から回復軌道に乗るや、工業製品輸出が全輸出の70パーセント前後を占めるなど、産業構造の更新にも成功したのである。

だが、外資依存の経済回復と発展は、「雇用の3割、GDPの5割、輸出の8割」を多国籍企業が占める「他力依存」「他力本願」経済(金融危機後は「キリギリス経済」)を生み出し、それはもはや「国民経済」とは言い難いものだ、というのが著者の厳しい現状認識である。これに伴い多国籍企業に仕えて途方もない高報酬を得る「体制転換貴族」が生み出されたばかりか、労働者も「ゲスト・ワーカー化」する。外資依存は消費者金融にまで及んだから、世界金融危機の直撃をものに受けたところにハンガリー経済危機の特質がある。それでいながら旧時代の「配分システム」は殆ど手付かずに居残ったから、旧時代を「国庫社会主義」とすると、現在の経済体制は「国庫資本主義」とも言えるもので、これはプーチン・メドベージェフ双頭政権ロシアの「国家資本主義」と対比される。ここからは中国も視野に入れて、さらに議論を広げることが可能となりそうだ。

本書が並みの体制転換論と違うところは、社会規範・倫理や官僚・一般市民の行動様式、広く社会のモラル的側面にも大きく目配りをしていることだ。しかし、それは決して「エピソード的」ないし単なる例証として挙げられているのではなく、著者の基本的な体制転換論と首尾一貫して論じられている。

著者によると、「社会主義」40年間に社会的規範の著しい「劣化」が進行したという。エリート層と一般市民は、今日でも「平時化」された社会主義時代の「行動規範」を共有しているから、一方は際限のない腐敗・汚職まみれとなり、他方は「役人主権」を黙認する受動的な社会規範が存続する。ここからすると、体制転換は社会のモラル的側面も含めた、経済社会の全体的な転換となり、

市場経済の導入はその一部に過ぎないことが分かる。

20年前には「現存する資本主義」がモデル化、理想化して捉えられていた。このように考えてくると、同じ『問い』が資本主義にも投げかけられることになる。現在の資本主義にも似たような社会的規範の『劣化』は、果たして無いだろうか。著者の厳しい体制転換後社会の認識は、そのまま資本主義にも跳ね返ってくるのではないか。

体制転換を経済社会の全側面に広げた著者の批判が厳しいだけに、転換の困難さは重い問いとなって残る。ハンガリーの場合、「他力依存経済」「他力本願経済」からの脱却方策について著者はいくつかの提案・示唆を行っているが、近年の経済成長方式の根幹に関わるものが含まれているだけに、その難しさが思いやられる。ここには著者の重要な貢献があるが、これはわれわれ共通の今後の課題でもある。

第6章と第7章にかけて論じられているカーダール政権の「歴史的評価と正統性」、「独裁権力下の個人と倫理」は、ハンガリー動乱後の粛清と治安警察の問題と絡み、極めて重い問題である。カーダール政権の「実体的正統性」については既に触れたが、だからといってナジ・イムレの処刑がそのまま正当化できるわけでもない。著者がここで書いているように、フルシチョフの意向に反してまでナジ処刑に踏み切った「カーダールの決断」から、皮肉なことにカーダール政権の「対ソ自立」が始まり、63年以降の「宥和政策」の下地が用意された、という歴史の『弁証法』に眼を向けるに止めて置こう。カーダールの墓碑銘には「私はいるべきところにいた、私はするべきことをした」とのみあって、名前は書かれていない。その「含蓄」だけは理解してやっても良いのではなからうか。

著者が100ページ冒頭で書いているように、この20年の体制転換から「経済的利益」を得た「勝者」は、旧共産党の「比較的若かった指導層(党エリート)」と「新旧両体制にわたって官僚体制の中枢部に居座ることができた高級官僚エリート」だったことは、疑いを入れない。これに政財界入りした一部の学者たちを含めると、旧ソ連・東欧諸国の全てに共通する現象である。だが、その中には思わぬ脚光を浴びたものもいれば(ハンガリーの場合にはホルンやネーメット)、歴史の舞台から消えたものもいる(同じくポジュガイ)。大きな歴史の転換期に広く見られる現象ではあるが、「使い捨てられていった」人たちを思うと、私の耳には“Sic Transit Gloria Mundi”(「世の栄光の移ろうや かくの如きか)」という言葉が、聞き慣れた歌のリフレーンのように聞こえないでもない。

社会的規範や個人倫理の問題まで視野を広げた本書は、体制転換後20年にして、ようやく出るべくして出た本格的な体制転換論である。しかし、それが投げかけた問題は大きく重い。多くの読者とともに再思考を続けることを今後の課題としたいと思う。

(さとう・つねあき 横浜市立大学名誉教授)

ゲーム理論で読み解く―『ポスト社会主義の政治経済学』読後感 倉林 義正

これは上記著作の書評ではない。この著作は、すでに昨年4月ハンガリー語による「変化と継続―やぶにらみのハンガリー社会論」と題するすこぶる瀟洒な装丁に仕上げられた書物としてブダペストの書肆から出版され、ハンガリーの読者たちから大きな反響を呼び起こした研究書の(幾多の工夫が凝らされた)日本語版であるだけに、その書評は当然この研究分野の達人の手に委ねられるべきであることが明白である。私が著者を知ったのは、遠い四十年に余る昔のことである。そのきっかけは、全く偶然の所産である。その経緯に深入りする場所ではないから、ここでは差し控えるが、先年公刊された小熊英二氏による大著『1968(上・下)』(新曜社)、に関わることと言えば、賢明なこの欄の読者には容易に推察することが可能であろうと思われる。それ以来私と著者とはある時は東京において、またある時はハンガリー(おおむねブダペスト)において、交友を重ねてきたのであるが、私はこの著書とは専門分野を異にする素人の一人であるに過ぎない。そうした素人のごく取りとめもない読後感を書き連ねることも「枯れ木も山の賑わい」の譬えの一興かもと考え、著者の懇篤なお求めに乗せられて、雑文を連ねることにした次第である。従って、ここは芳醇なトカイワインの杯を重ねた余りの微醺のなせる、すこぶる個人的な体験とその感想の羅列にすぎないものであることをご容赦頂きたいと予めお断りしておきたい。

本書の発端の一つが1989年の秋に起った世にいう社会主義体制の大きな転換であることは言を俟たない。その二ヶ月ほど以前に私を取り巻いたすこぶる個人的な体験は今でも鮮烈に思い出される。その年の8月中旬、私どもは二つの学会に参加するために成田を発った。最初に赴いたのが(当時の西独)コブレンツツとライン川を隔てて向き合う対岸を分け入った保養地ランシュタインで、隔年に持たれている「国際所得国富学会」(通称IARIW)に臨んだのであった。私はその三年ほど前まで、国連本部における統計部門の責任者を務めていた関係で、その時の会議における重要な主題であったGDP関連統計の国際的なガイドラインであるSNA1968年版を改訂するための議論に忙殺された。すでに夏は終わりを迎えつつあった。次の「国際投入産出分析学会」の開催までは十日あまりの隙間があった。その間を利用して、会議の緊張からの解放を求めて向かったのがチロルの小邑ゼーフェルトであった。周辺の山をめぐる小さな山歩きで心身ともにフレッシュした私どもは、数日後インスブルックからの国際列車でブダペストを目指したのであった。国境での入国は予想の通り厳しいものであった。その数年前の国連在勤の折、ハンガリー政府から賓客として招待を受けたことがあったが、ブダペスト空港で赤じゅうたんの礼で迎えられ、車に分乗してホテルに向かった時の入国の扱いと余りの違いが懐かしく思い出された。当時すでにこの首都に在住していたこの書物の著者である盛田氏と再会して、彼の車で会議の場所であるバラトン湖の西岸の町ケステレーに着いたのは八

月月末であった。会議が始まった二・三日程経ったころのことであった。ホテルの周辺に駐車する車に東独ナンバーがかなり見かけられるようになってきた。街中でも同じような体験をした。どうやら例のピクニック事件の余波がこのころ辺りに及んできていたのであろう。しかし、私は会議の進行に巻き込まれ、周辺のニュースに気に留める余裕を全く失っていた。さらに二・三日の後、ハンガリーとオーストリーの国境が解放されるようになったらしいという噂が囁かれるようになった。その現実を嫌と言うほど思い知らされることになったのは、会議が終わり、再びブダペストからウイーンへ向かう国際列車に乗ってからのことだった。その列車は、東独からの旅客によって溢れ、二等車はもとより、一等車の通路まで喧騒なドイツ語が飛び交っていた。結果として、われわれを含めてコンパートメントの乗客たちは、ウイーンで解放されるまで、その中に封鎖されることを余儀なくされる始末と相成った。肝心の国境線には最早哨兵の影は人っ子一人さえも見出すことができなかつた。体制変化の胎動が始まりつつあったのであった。

著者による『ハンガリー改革史』(1991年)、『体制転換の経済学』(1994年)と言った長年の知的思索の集積と稀なる現実感覚により織り成された専門書が、堰を切ったように世に問われ始めたのが、この大いなる体制転換からの直後であることは人のよく知るところである。これに続く第三の著作が『ポスト社会主義の政治経済学』に他ならない。これは前の二つの著作により培われた洞察に基づく大胆な総合である。体制の転換に伴うハンガリーの経済と社会における変革の現実を克明に分析した上で、そうした現実を導く原理に鋭いメスを加える著者の並々ならぬ力量は、到底他の日本人専門家の追隨を許すところではない。このことは幾ら強調しても、過ぎることはない。まして、この研究分野の素人の一人に過ぎない私にとって、この名著の論評に参加する資格は全くないと断言することができる。ただ本書の第1章および10章と補遺の部分は、多少とも私に関心を共有しうる部分である。そのことを念頭に置きながら、多少の読後感を述べるに止めたい。

著者は、開巻冒頭の第1章において、問題となっている体制の転換を「計画から市場」へという表現で片付けることはできないと指摘している。中央集権的計画経済の成立可能性の経済理論的基礎を問う議論は、ハイエクとランゲと間で交わされた論争を中心として、すでに前世紀の三十年代から続けられてきたところであり、その賛否を明らかにするためには、それらの論争の詳細に分け入る必要がある。そのことを承知の上で、あえて乱暴に結論づけるなら、体制転換の問題の切り口として、かのパレート最適性の達成を自由な市場機構に委ねることが出来るとする新古典派経済理論のパラダイムに頼ることは適切ではないと思われる。むしろ私は、この解決は、T.シュリングが着想しているゲーム理論の展開の上に築かれるべきであろうと考えているのであるが、この点に関しては後に言及する。

すでに多くの専門家によって指摘されているように、著者が論点を指摘し、掘り下げるに当って秀逸な用語を巧みに駆使する才能は抜群である。本書の中にもそれらの実例が数多く散見される。体制転換の哲学を問う第1章で言及されている、社会を構成する組織を細胞体と見立てる「アポトシス型社会」と「ネクロシス型社会」との対比(著者の言う対概念)は、その好例であろう。ここで、今更言うまでもない注釈を加えると、基となっている細胞生物学の概念としてのアポトシス概念とネクロシス概念の間には、論理学上での双対原理は適用されないことに注意しておくべきであろう。その意味で対概念という用語はいささか曖昧である。これら二つの概念が双対の関係を持たないが故に、著者は安んじて考察の焦点をネクロシス社会に絞ることが可能となってくるからである。そのことは別にしても、著者が、これらの二つの概念を生物学、もっと限定的には細胞生物学から引き出してきていることは、体制転換の理論における今後の展開にとって非常に重要なポイントであると思う。ケンブリッジ大学における最初の経済学教授のポストに就いたA.マーシャルは、前世紀の始めに著した「経済学における力学的類同性と生物学的類同性」と題する論文において、暗に一般均衡といった力学的アナロジーに偏するワルラス流の議論を警めて、経済理論において生物学的アナロジーを利用することの必要を力説したことがあった。しかしその後の新古典派経済理論の流行は、ほとんどこのマーシャルの警告を無視してきたように思われる。ただこの偏向は前世紀末以降のほぼ三十年の間に次第に是正の方向を辿りつつあるように見える。例えば、生物学者であるM.スミス の著作『進化とゲームの理論』(1982)は、ひとり進化生物学の発展のみならず、ゲームの理論そのものに対して、いわゆる「進化ゲーム」理論の開発と展開を通して大きなインパクトを与えたことは人のよく認識するところとなっているからである。

再びさきに述べた対概念に戻る。著者盛田氏は、これまで存在していた社会主義体制は壊死したのであって、細胞生物学におけるネクロシスに近いとされる。例えば、細胞が細菌などによる害毒に侵され、修復が不可能な傷害を受けると、細胞は死滅する。そのとき、細胞膜の透過性が亢進して、細胞の中に大量の水が入ってくるために、細胞体およびその中にあるミトコンドリアなどの小器官も膨張し、ついには細胞膜が破れ、核をはじめ細胞内の要素が一斉に周囲に放り出され壊死(ネクロシス)に至るのである。言い換えると、ネクロシスとは、外敵によってもたらされた他殺にほかならない。そうだとすると、問題の社会主義体制を壊死に追いやった外敵とは何であったかが問われるべきであろう。ただ本書ではこの問いに深入りすることはなく、「社会主義社会の消滅からどのようにして新しい社会が生成されるのか」という問題の提起、換言すると、「無から有を生む」という「社会転換のアポリア」へと話題を変えているのであるが、私には壊死をもたらした外敵を問う必要がない理由そのものについてのより詳細な情報が欲しい気がする。

ここで著者とは見方を変えて、社会主義体制の終焉をアポトシスと見たとしよう。その場合には、アポトシスを起こした細胞が核の中で染色質の凝集をもたらし、DNA分解酵素の作用によ

て、長いDNAの細糸がブツブツに寸断されるという一連の経過を辿ることになる。これを体制の崩壊になぞらえると、これをある進化ゲームのモデルとして再構築することを試みることも可能であろう。またその試みは、検討に値するものと思われる。ところで、その場合の進化ゲームにおいて、達成される(として)その進化的安定戦略から何が含意されるのであろうか。そうした問題を検討するに当たり、注目すべき要素は、結局のところ、そうしたゲームの当事者(プレーヤー)たちが共有する情報、およびそのばらつきの程度ということになるのではないか。著者が提起した「社会転換のアポリア」の背後にはこれらの問題が伏在しているように思われる。

ところで、こうしたゲーム理論における進化ゲームの枠組みから離れて、社会および経済の制度ないしは組織の歴史的変動の現実をも念頭にいた上で、同じゲーム理論における発展という刺激の中で、体制の進化のプロセスを理論化しようとする幾つかの試みが最近なされている。その一つとして、制度なり組織における歴史的変動の解明、とくにその数量経済史的貢献によって1993年のノーベル経済学賞を受賞したD.ノースがその理論と方法を要約している『経済史における構造と変化』(1981)を基礎として、これにさきに言及したT.シュリング(彼は2005年のノーベル経済学賞の受賞者でもある)がその著作『ミクロの動機とマクロの行動』(1978)の中で展開している「近隣の人々における隔離モデル」を下敷きにした研究が、『個人の戦略と社会構造: 諸制度の進化理論』(2001)と題してプリンストン大学出版部からH.P.ヤング(出版当時著者はジョンズ・ホプキンス大学の経済学の教授)により公刊されていることに注意しておきたい。

この研究の特徴は、(1) 潜在的なプレーヤーたちが、その大きな母集団の中から特定されることなく選ばれること。(2)これらのプレーヤーたちの駆け引きが、ある適切に定義された社会空間における近接性により多分に依存していること、(3) これらのプレーヤーたちの行動は、完全に合理的でもなく、またその情報も完備ではないこと。しかし、彼らは、他の当事者たちがいかに行動するかを彼らの過去の行動に基づいて自発的に予想した上で、この予想を基礎として行動すること。従ってこれらの行動は、後々のプレーヤーたちにとっては、慣例(ある種の制度)となって、彼らの行動を制約するという意味で、ある種の合理性が約束されているゲームが作られること。(4) さらに、こうしたゲームの帰結が描く動学経路は、さまざまな外生的要因によって生起するランダムな動揺によって翻弄されることで特徴付けられたゲームの枠組みを持つことである。しかし、ヤングが試みている、こうしたゲームの解から導かれる興味ある推論について、これ以上詳細に議論するためのスペースは、非常に残念ではあるが、全く残されていない。ここでは、盛田氏による卓抜な新著によって喚起されたthrillingなまでの知的興奮の恩恵に感謝しつつ、この雑文を閉じることにしたい。

(くらばやし・よしまさ 一橋大学名誉教授)

盛田常夫さん、ますますお元気で活躍中そうですね。陰ながら喜んでます。

『ポスト社会主義の政治経済学』どうもありがとう。すぐには取りかかれなかったけど、読みだしたら面白く、引き込まれました。ご自身の理論的整理も随分進んで、驚くほど歯切れのよい、明快な書物となっています。かつて、同じような問題意識をもってヒアリングを行ったことを懐かしく思い出します。当時はまだ動いている最中だし、期間も短かったので、とても整理しまとめるところまでゆきませんでした。それだけにハンガリーに根を下ろしたあなたの書物を手にして、感慨深いものがあります。

ラーコシ、イムレ・ナジ、カーダール、それに彼らを取り巻く幹部たちの人物像が身近に感じられるようになりました。革命とは言い難いプロセスを経たことでもあり、それらの人々の歴史的功罪の社会的評価も極めて微妙なものとなっているのもよく理解できます。ブダペストの国立美術館に行ってハンガリーの近代絵画を見たとき、その暗さに衝撃を感じたのですが、第一次大戦後から始まった民族の心の葛藤は依然続いているのだな、と思われてなりません。

さて、体制転換をとらえるには社会哲学的視点が必要というのはまさにその通り。

ところで、<計画から市場へ>を退け、配分(配給)システムから交換システムへという整理は理解できますが、当初の精神としては、主観としては、計画経済をやろうとしたが、手段もなく、戦時の緊急の必要に押し流されて物量統制に流されていったということではないですか。社会主義を論じるとき、主観と現実とを一応区別してみることが必要有益に思えるのですが。

自生的継続的發展を促進せず、能力の退化劣化を促進する自己破滅的なものになったというのは、厳しい物言いだですが、その通りだと納得します。それにしても、私には、「恣意的経済管理」の実情を特定の年の実況として赤裸々に描いた記録なり、ルポなりを是非とも誰かに残してもらいたいという気持ちが強く残ります。特定の企業の党委員会あるいは企業長の記録でも。今なら復元できるのではないのでしょうか？人々が忘れてしまいたいと思っていると、記録は散逸し、人々の記憶もたちまち消えてしまうでしょう。しかし、それがきつと後に役立つことになるに違いないと思うのです。

直面しているのは移行でなく社会の転換であるのに、その理解を欠いたIMFなどのアドバイザーたちが経済システムの単純な移行を考えたという指摘は鋭い。その通りだと思います。その結果生まれてきたのが借り物経済とゲストワーカー現象であり、脆弱な経済は繰り返し経済危機に見舞われる。

ところで、現存した社会主義は社会主義イデオロギーに支配されたものだったのか？こう問いかけ、戦時という特殊状況ではともかく、平時になればお題目と化し、個人の生活倫理を律する戒律にならない、したがって戦時のイデオロギーではあっても、平時になるとオポチュニズムに墮してしまう代物でしかなかった、という。

これも鋭い把握だと思う。ただ、社会主義は平時になれば個人の生活倫理を律する戒律たりえないとは果たして言い切れるか？

計画当局と企業長との間のコミュニケーション、実際にどういう動機が働くかを見れば、確かにこれはその通りというしかないと思います。しかし、上からの指令によるのではなく、相互に日常的に接し、理解しあえる小さな共同体(企業、協同組合)の間には連帯、共生の気持ち、精神が自然に脈打つのではあるまいか。

はぐまれるべき市民的倫理というもの、じつは半分ぐらいはそのようなものと重なるのでは？ひどい倫理的退廃をこそなんとかしなければならぬと思いますが、独立した私的個人の倫理として確立させようとするのは、少々違うのではないかと思います。それこそ、難しいことではあるが、第三の道を見つけ出さなくては、と思います。官僚独裁でもなく、市場主義の百鬼夜行でもなく、共生、連帯の道を。それ一色で社会を組織しようというのは無理で、市場にも国家にもそれなりの働きをしてもらわなくてはなりません。

私には、まだ市場社会主義(実際にあったものでなく、もっと上等な)についてその可能性を考えてみたいという未整理な気持ちが残っている次第です。かつてバラッサ・アーコシュ氏からの話をよく聞き、彼の著書をめぐって大いに議論したかったのですが、いまだ果たしていません。

また、機会があったら、議論をいたしましょう。今回はここまで。

2010年3月10日 川上 忠雄
(かわかみ・ただお 法政大学名誉教授)

運動サークル情報

テニス・サークル

土曜・日曜テニス部の紹介をさせていただきます。

①現在の部員数

土曜日:10名(男性9名、女性1名)
日曜日:20名(男性13名、女性7名)

②活動場所と時間帯

土曜日:ヴァーロシュマヨリ テニスクラブ
午後3時~6時

日曜日:Match-point tennis Club
午前9時~11時

<http://www.matchpoint.hu/english/main.html>

③本年度の活動計画

土曜日:4月末にペアテニス大会。秋交流テニス大会。
日曜日:春季対抗戦、バーベキュー等のイベント(随時)

④連絡先

土曜日:杉本 メールアドレス:arpad1162@yahoo.co.jp
日曜日:鈴木 メールアドレス:nn-suzuki@u05.itscom.net

⑤その他

土曜日:初級者から中級者が集まって試合を中心に活動しています。

日曜日:日曜テニスは家族で参加されている方も多く、初心者から上級者まで和気あいあいとテニスを楽しんでおります。テニスに興味のある方は1度見学にいらして下さい。

バドミントン・サークル

Jó napot kívánok(こんにちわ)!

ハンガリー日本人バドミントンクラブです。2009年の10月よりハンガリーでもバドミントンがやりたい!と熱い思いを持った人たちが集い、作られました。毎回、約8~12人が集まり、練習で体を温めた後に試合を中心に楽しく活動しています。参加している人はバドミントンの経験がある人や、ま~たくの未経験者の方、色々です♪ いろんな分野で活躍している日本人同士の交流も楽しいです。さあ!あなたも一緒に気持ちの良い汗を流しましょう!(お子様連れでのご参加も問題ありません♪)

①現在の部員数

大人:15名 子供:6名(小学生)

②活動場所と時間帯

日時 毎週日曜日の午後4時から2時間
場所 中学校体育館(ブダペスト2区、Kokeny u. 44.)

③本年度の活動計画(対抗戦等の日程でもあれば)

ウィーン日本人バドミントンクラブとの交流会(今後計画予定)

④代表の方の名前と連絡先及び入部又は問合せの際の

渉外の方の名前と連絡先

代表 植條 公士

問合せ先 hujpbad@gmail.com

ゴルフ部 年間スケジュール

月例会 (PANNONIA Golf Course)

第1回 3月28日(日) 07:40 Tee Off
第2回 4月11日(日) 08:00
第3回 5月16日(日) 06:40
第4回 6月13日(日) 08:00
第5回 7月11日(日) 08:00
第6回 8月 8日(日) 08:00
第7回 9月 5日(日) 08:00
第8回 10月10日(日) 08:00
第9回 11月 7日(日) 07:40

「大吉杯」マッチプレー選手権

春季大会(第12回) 4月中旬~7月中旬
秋季大会(第13回) 7月中旬~10月下旬

PANNONIA WORLD CUP(欧州、アメリカ、アジア選抜)
5~6月頃(日程調整中)

第6回四カ国対抗戦

(オーストリー、チェコ、スロバキア、ハンガリー選抜)
6月20日(日) 08:20 ~
at PANNONIA G.C. (幹事国:ハンガリー)

「阿羅漢杯」争奪戦(ア라운드選暦による熾烈な戦い)
8~9月頃(日程調整中)

ゴルフ部代表:町野憲善(スズキ)、副代表:宮崎好文(日清食品)

ランニング・レース予定(まとめて申し込み)

今年の主要なレースは以下の通りです。

4月18日 T-Home (12km, 6.4km, 3.3km,リレー)
5月 9日 K&H マラソンリレー
5月29日 ドナウ湾岸道路レース(5km,10km,ローラースケート)
9月 5日 ブダペスト国際ハーフマラソン
9月26日 ブダペスト国際マラソン
10月17日 コカコーラ・女子
申込は日本人学校あるいはmorita.magyar@gmail.comまで。



「こちらはJ-CATの××さんです」

青木 都美子

「こちらはJ-CATの〇〇さんです」私たちはこのように紹介されることがたびたびです。「う～ん？ J-CATってなに…？」

これは外務省の派遣事業の一つ(日本文化発信プログラムによって派遣されたボランティア)を指しています。このプログラムは昨年一月末より中・東欧4ヶ国(ハンガリー・ポーランド・ブルガリア・ルーマニア)に於いて実施されています。このハンガリーには7人の大和撫子(死語かな)が派遣され、あたかもその住民になるべく日々の暮らしを目指し、一年になりました。

7人はそれぞれの地(ブタペスト・ヤースペリーニ・ベスプレーム・カポシュパール・ミシュコルツ・デブレツェン)で、大学または高校に所属し、日常的に日本語の指導を行い、それに伴う日本事情や日本文化の紹介を幅広く行っているのです。

2009年1月28日どんより曇り空のハンガリーに入国し、それからわずか十日目からそれぞれの地での一人暮らしがスタートしました。

ブタペストに派遣された私とは言えば、まずは鍵の文化にカルチャーショックを受けました。バス・トイレ・キッチン付きのワンルームのアパートですが渡された鍵はなんと6つ。ドアの前に鉄格子のドア『私は看守?』と、この国の苦難の歴史をちょっぴり感じました。

それからは地図を片手に、住所を頼りに、覚えてた「Hol van a ~?」を誰彼かまわず使い、行かねばならぬところへなんとか行き着くという日々、お陰様でバス・地下鉄・路面電車を難なく(?)マスターしていったという訳です。こうなればスーパーでも市場でもレストランでも××通りでも本屋でも…幸いブタペストにはもう一人派遣されており、相

棒と共に必要に応じ出かける楽しみもおぼええました。すっかり慣れてきたのが“テラスでお茶”のできる頃でした。街並みの緑を楽しみ、木々の手入れの良さに感心し、人々の遠慮がちな親切が心地よく、このブタペスト暮らしがすっかり気に入っていきました。

チーズ、ヨーグルト、ハム(ちよっとしょっぱい)等がとてもおいしく、グリーンアスパラガス、ホホワイトアスパラガスの甘くて新鮮なこと(旬を外すとすぐ店頭から消えてしまう)、また日本と同じようなかぶ、白菜があり、これを



使えば日本風なおかずも作ることができ、一番大切な食事にも不満はありません。さすがにお米だけは気に入ったものを常備していますが。今凝っているのは近所のスーパーで買える“もやし”、日本に比べ値段は格段に高いのですが…炒めたり、ゆでて酢の物にしたりと一人悦に行っています。

一年経って感じていることは、私のハンガリーに対する好意的な気持には、ハンガリーの人々も日本に対し好意的な気持になってくれるということです。互いにより深く相手を知ろうとする気持ち、それが相互理解につながり、互いに敬意を払う関係になっていくものと思います。

“Budapest 春の祭り”、“アニメコン”、各地の日本友好協会が行った“日本の日”そしてハンガリー人日本語学生友好協会の“日

本文化祭”、不特定多数の人を対象とした中央市場での“日本の日”などなど、たくさんのイベントに参加し、文化紹介・体験を行いました。そこではいろいろな分野における日本通のおじさま、おばさま、日本語の美しさにしびれているという高校生、さらに浜崎あゆみを熱唱するこれまた高校生、「どうしても日本に行きたい!」という大学生、高校生…多くの人々に出会いました。

どうして?なぜ?日本なの、日本語なの…?私には未だ解りません。アニメやJ-POP はインターネットの普及で日本とほぼ同時に視聴できる今、当たり前自分のもののように吸収している若者、オリンピックや世界大会を通じ広くヨーロッパで愛好されている武道、ハンガリーをはじめ世界各国で折り紙を愛好している方々の作品、これは日本の折り紙の概念を超えたペーパークラフト、まさに芸術作品、いろいろなところで出会う【ハンガリー版日本】、日本以上に日本らしく…何がこれほどまでに昇華させるのでしょうか。このような地で私ができることは、しなければならぬことは何でしょう。

四季のはっきりした日本、自然に恵まれた日本、この四季を、自然を生かした暮し、暮しの工夫から生まれたさまざまな伝統行事、伝統文化、これを脈々と伝え日常生活に取り入れている私たちの日常、これを素直にありのままに伝えること、これが広く日本を知らせ興味を深めるきっかけになると考えます。

愛だの侍だの武士・雅など、習っていない漢字を嬉しげに書いて見せる姿、これは興味・好きから何が何でも覚えたいという欲求、それがますます日本への熱い視線につながっているのではないのでしょうか。毎日の日本語授業に出てくる言葉づかいやいろいろな場面、これらを学ぶなかで疑問を感じ、なぜと考えていく、納得をする、そのなかで日本への興味も深まるものと信じます。

2年間という限られた派遣期間、頬をなでる一瞬の風、波紋を広げる一石になるよう活動に励みます。

『好きこそものの上手なれ』

リスト音楽院ヴァイオリン科
門野 由奈



いつからか、旅行先や日本からこの国に入った時に'戻ってきた'感覚になるようになりました。ハンガリーは今や私に

とって、外国でもなく、単なる留学先でもなく、愛すべき地元です。はじめ留学すると決まったとき、友達からはハンガリーってどこ?なんでハンガリーに行くの?などと聞かれました。十代だった私は、自分で決めたことながらも少し恥ずかしく思うこともあったし、もっと耳慣れた国に憧れを感じたりもしました。語学教室ではじめての授業で「さようなら」の一言を習った瞬間は、絶望すら感じました。あれから5年、帰国を半年後にひかえた今、私は胸をはってハンガリーに留学してよかったと言えます。外国人である私に対して、何の差別もせず熱心に教えてくださった先生方、学校で毎日笑顔で話しかけてくれたクラスメートたち、降りる駅を教えてくれたバスの乗客のおじいちゃん。なんだか垢抜けない、どこか影のあるハンガリー人ですが、その温かさには何度も救われました。

ゆっくりと時間が流れるこの国で、素敵なのを素敵と思える時間や、自分を見つめる時間は、日本にいたときよりも多くとれました。そんな中で、もちろん日本人であることへの誇りや日本人らしさを再確認することもあったし、逆に日本でメディアや本などからの情報だけでは知り得ることのできなかつた外国人の価値観や視野も知ることはできました。しかし、私なりにたどりついた結論は、やっぱり人間はみんな人間であるということ。楽しいときは心から笑い、悲しいときは涙を流して泣く。困っている人がいたら助けてあげて、悲しんでいる人がいたらなぐさめてあげる。単純なことです。見た目や言語が違うだけで全く違う人間に思いがちで、来てからしばらくは自分らしくいられないことが多く疲れることもしばしばでした。しかし留学期間の後半はいつでも自分らしくいれるようになり、友人も増えました。それが冒頭で述べた、'戻ってきた'という感覚になったことにもつながるかもしれません。み

んな違ってみんないい。そんな感覚になれたとき、私とハンガリーという国の距離感は一気に縮まりました。

留学の目的であった音楽の面でもたくさんのことを学びました。試験前どんなにつらくても、毎日の練習が苦痛でも、音楽そのものは日を重ねるごとに好きになっていきました。こちらの先生方は、あまり頭ごなしに否定することはありません。常に共通して教えていただいたことは、心から音を楽しんで、その気持ちを表現して伝えること。こうしなさい、あししなさい。ではなく、こうしたい、あししたいと思える感性を育てていただけたことは私にとって一生の財産になりました。今後、ここで学んでいた時間がどんどん昔のことになってしまうけれど、ここで教わったことを忘れることなく、今後ももっともっと音楽が好きになれたらと思っています。

好きこそものの上手なれ。
それが上達につながると信じて。

『ハンガリーに対する思い』

デブレツェン大学ハンガリー語科
山野井 茜

私がハンガリー語を勉強するきっかけになったのは、合唱でした。高校生の時、合唱部に所属していた私は、プロムジカ合唱団の日本公演と一緒に歌わせて頂くという機会に恵ま



れ、そこからハンガリーに興味を持ち、ハンガリー語も勉強してみたいと思うようになり、日本に唯一専攻語科のある大阪大学外国語学部(旧大阪外国語大学)に入学しました。大学に入学してからは合唱以外にもハンガリーの文化や政治にも興味を持ち始め、ますますハンガリーに留学したいという思いは強くなりました。

そして今私はハンガリー政府から奨学金を頂いてデブレツェンというハンガリー第2の都市に留学しています。私は留学するときに「せっかく憧れの大好きなハンガリーに留学した留学生

んだから自分のしたいことも全部しよう!!」と決めました。そう決めてから、毎週末デブレツェンから車で40分のところにある北部の町ニーレジハーザのプロムジカ合唱団の練習に通ったり、大学の音声学の先生にハンガリー語の発音のレッスンをしてもらったり、冬季の長期休暇にはマチョー刺繍が有名なメズークベジドという町に刺繍を習いに行ったり、自分の直感が働いたことはなんでも積極的に参加しました。その中で経験はとても貴重なものでした。

私は昨年の9月に留学してから今まで、ここでの留学期間が短いと思ったりすることがありません。たくさん色々なことを経験させてもらい、ありがたいことに友人に恵まれ、かけがえない親友と思えるハンガリー人とも知り合えました。単に運がよかっただけかもしれませんが、なにより第一にハンガリーが大好きでハンガリーへの「愛」があるからこそだと思っています。確かに留学期間の中では大変なことも、嫌なことはあったと思いますが、なによりもここでの生活が楽しくて、ハンガリーが大好きで、ハンガリー人が大好きだからそんなネガティブな思いは消えてしまいました。

またこの留学は自分のことを見つめ直す、いききっかけになりました。寛大になんでも受け入れてくれるハンガリー人の友人たちのおかげで自分をちゃんと主張することができるようになり、自分に自信が持てるようになりました。勉強面では日本の学生よりも真摯な姿勢で勉強する学生の姿をみて、本当に勉強するとはどういうことかを学ばせてもらい、学生として勉強する喜び、それを支援してくれている家族への感謝をあらためて感じています。

私を受け入れてくれ、そしていつも優しく温かい友人、プロムジカ合唱団の人たち、大学の先生方、マチョー刺繍でお世話になった町の人たち、そしてこれらの貴重な経験やハンガリーに来てからのたくさんの発見を与えてくれるものになった、留学の奨学金を下さっているハンガリー政府。たくさん感謝してもしきれないくらい感謝しています。だから私は将来何らかの形でハンガリーに恩返しをしたいと思っています。それはもしかしたらとても時間のかかることかもしれませんが、でも、長い時間がかかってでも絶対になりたいと思っています。

留学期間も残り少ないですが、いつも支えてくれているみんなに感謝しつつ、留学の目標の一つである言語の上達を目指して悔いのないように頑張っていこうと思います。

憧れの海外生活

ELTEハンガリー語学科

齋藤 択未



僕は大阪大学ハンガリー語専攻で、現在ブダペストのELTE大学でハンガリー語を勉強しています。

小さなころから海外の生活に憧れていて、そして今、ここハンガリーという未知の地に来て、日本と全く違う環境で生活を送っています。最初のころは周りの人が何を言っているのかまったくわからず、ルームメイト3人も全員ハンガリー人で英語もほとんど通じないという状況で、毎日が身ぶり手ぶりのサバイバルでした。特に、滞在許可書などの手続きの時やルームメイトとの会話はお互いにつたない英語だったりして、聞きたいことがあったら辞書をフル活用して一度紙に書き、それを読んで伝えたりと、思えばとても時間のかかる遠回りな会話をしていたような気がします。

授業も自分には難しすぎで他の留学生と明らかにレベルが違う中、がむしゃらに毎日へとへとになりながら生活していました。今では留学生とも仲良くなり、一緒に飲みに行ったり、ハンガリー人の友達も何人かでき、映画に行ったりカフェしたりしています。授業が難しいのは変わりないですが、初めてのころと比べると随分と理解できるようになったと思います。日本に居た時よりも、もっとハンガリーのという国に興味を持てるようになり、ハンガリーの文化の授業も楽しく受けられるようになりました。僕はハンガリーで留学生生活を過ごせてよかったと思っています。将来、ハンガリー語を生かした仕事に就くかどうか分かりませんが、ハンガリー語をここで学んだ事、ここで経験したことは一生ものです。必ず未来の僕にいい影響を与えることと確信しています。さて、僕のハンガリー生活を少し紹介します！

授業はだいたい午前中からあり。一番早くて8時半から、日によって異なりますが昼食をとった後、15時ごろには授業が終わります。授業が終わると仲間達とカフェするか、図書室で、その日の復習と宿題をじっくりする事に

しています。天気がいい日はドナウ川沿いやブダの王宮を散歩。夜はみんなと飲みに行った、寮のキッチンで料理をしています。週末は、なんでもいいので、どこか文化的な所に行ったりしたりして感想を述べるという月曜日の宿題の為に、美術館などに行ってレポートします。もしくは、みんなと一緒にパーティです。パーティの次の日は、殆ど二日酔いになり家でゆっくりしています。長期の休みがあると旅行に行きます。ヨーロッパの中心にあるハンガリーならではの、比較的どの国にでも行きやすいですし、いろんな国に行ってまた違った景色や文化を見て感じる事も、とても大切だと思っています。もちろん、そんな事も思いつつも思いつき楽しんでいますが。一番の思い出は、ずっとドイツのクリスマスマーケットに行ってみたくて思っていました、日本だと、ちょうどその時期はまだ学校があるのでどうしてもその夢は実現できませんでした。でも、この留学中に高校からの念願のドイツクリスマスマーケットに行くことができました。2週間ほどかけてドイツ7都市とチェコのプラハを巡り、クリスマスを堪能しました。これは僕にとって最高の旅となりました。

このような感じでゆっくりと流れる時間の中で生活しています。ゆっくりですが確実に帰国の日が迫ってきています。残りの日を楽しく充実した日々を送って、大きな男になって帰りたいと思います。

挑 戦

Corvinus大学経済学部

(早稲田大学交換留学生)

森 隆真

北海道生まれ、北海道育ち。得意科目は英語、ではなく国語。海外に出たことも、ない。大学入学で上京した時にはまさか自分が1年半後にはハンガリーで生活するなどと思ってもみませんでした。ハンガリーはおるか海外ともおよそ縁のなかった僕の転機は、1年の留学が必修である国際教養学部に入學したことでした。多くの帰国子女と留学生に囲まれながら英語で授業を履修する中で、英語を話せる人など掃いて捨てるほどいることをしみじみと実感。それまでは純ジャパ(弊学部で日本生まれ日本育ちの学生を指

す)な僕は、多くの学生がそうであるように当然英語圏へ語学留学をするものだと思っていたのですが、さてよ、と。どうしたって1年では海外生活云々の帰国子女たちには勝てませんし、そもそも今どき語学留学も珍しくもありません。なにか違う選択が求められていました。国に住んでみなければ知ることのできない国、第一目標は今後海外で単身でも生きていけるだけのタフネスを身につけられること、環境は色々な国を見て回れる地理かつ奨学生の僕でも許容できる物価であること。これらが僕の求める条件でした。そうして最もハードかつ広い意味で学びのある留学先として、ハンガリーブダペストのCorvinus Universityに350の提携先から白羽の矢が立つこととなりました。

大学ではビジネスと国際関係を学ぶことにしました(教養学部;リベラルアーツなのでとりわけ専門と言うものがないのです)。Corvinus大学は日本語ではブダペスト経済大学、とされるように経済・経営学分野に定評があります。同時に欧州の歴史や国際関係を中東欧の人々の視点から学ぶことができるという充実した学習環境です。また、一般的に日本からの留学先にはアジア人学生が多いため、北米、欧州にありながら「リトルアジア」の様相を成すという皮肉に見舞われることが少なくないのですが、ここでは見事に欧州系学生ばかり。外見の違いに身構えることがなくなりました。同じ英語の授業ではあるのですが、日本の時と決定的に違うのがオーラルの要素が多い点です。日本では評価がレポートやテストでなされるのが一般的ですが、ここでは授業中の発言やプレゼンテーションが重要な位置を占めるため、違った部分の力を伸ばすことができていると感じます。

授業以外の過ごし方としては、平日はせつかくの音楽の都ということでオペラやバレエ、



クラシックをよく栈敷席で鑑賞しています。一

ハンガリー中毒

バラシ・インシュティテュート

竹田 麻子

こんにちは。現在ブダペストで「ハンガリー学(Hungarológia)」を勉強している竹田麻子と申します。私は極度のハンガリー中毒です。私のハンガリー中毒は、学生時代に1年間デブレツェンへ留学した時に始まりました。当時の大阪外国語大学でハンガリー語を専攻し、2年半の勉強を終えた後、デブレツェン大学に通い始めました。しかし、大学の二年半を学業のみに費やしたわけではなかった私は、留学当初は



全くと言って良いほどハンガリー語が理解できず、「ありがとう」、「ごめんなさい」、「ハンガリー語専攻の1年生です(これは1年生の最初の授業で繰り返し練習したので、頭に残っていたのです!ただ残念ながら、留学時はすでに3年生でした…)」程度しか話すことができませんでした。そんな中でも、ハンガリー人や他国出身の留学生仲間にも恵まれ、ハンガリーのお母さんと呼べるような人が二人もでき、食べて飲んで、これまでの人生で最高と思える1年を過ごすことができました。もちろん、差別をされたり失敗したりと悔しいことも色々ありましたが、振り返ってみれば楽しいことの方が断然多かったように思います。

楽しかった思い出に招かれるように、留学を終えた後も毎年ハンガリーへの旅行を続けていました。ハンガリー人の友人に会ったり、私と同様ハンガリー中毒でハンガリーへ舞い戻ってきた留学仲間と会ったりして、毎回「やっぱりハンガリーは最高だ!」という思いを強め、次のハンガリー旅行計画をたてるのでした。

大学卒業後は企業に就職し、全くハンガリーと関係のない業務に就きました。仕事は充実していましたが、「やっぱりハンガリーで働きたい!」という強い思いから退職、幸いなことに奨学金プログラムに参加できることになり、2009年9月からBalassi Intézetで「ハンガリー学」コースで勉強中です。

さて、この「ハンガリー学」コースですが、これはハンガリー語を始め、歴史、文化、社会など、とにかくハンガリーに関すること全てを勉強するプログラムです。授業は全てハンガリー語で行われ、期末には筆記、口頭試験も待っています。ハンガリー中毒の私ですが、予想していたよりも濃い授業内容に面食らっていました。クラスメートはポーランド人、ブルガリア人、セルビア人、クロアチア人、ルーマニア人、トルコ人で、皆ベラベラとよく話します。親がハンガリー人である学生もおり、予期せず上級者クラスに入った私は、初めはクラスメートの語学力の高さに驚き、とてもついていけないと焦りました。しかしながら、ここで負けては仕事を辞めてまで来た意味がない!と思い、必死でクラスにしがみついている状態です。

私がクラス唯一の(東)アジア人ですが、メリットもデメリットもあります。デメリットから挙げると、日本語とハンガリー語で共通する単語が少なく、わからない単語が人一倍多いということです。特に、病名や学問の名前などラテン語起源の単語については、私には「単語からでは想像もつきません!」というものも、クラスメートたちの母語では同じラテン語起源の単語となっているものが多々あり、彼らにとっては完全にハンガリーオリジナルの単語よりも理解し易いようです。メリットとしては、ハンガリーを含めヨーロッパのそれと大きく異なる日本の文化、習慣が興味深いらしく、日本やアジアに関する何を言っても、クラス全員が面白がって耳を傾けてくれることです。これは単なるメリットでなく、彼らの優しさでもあります。

昨年9月から約半年間、順風満帆とはいかないながらもテストなどを乗り越えてきたおかげで、最近では自分のハンガリー語力にも自信がつかってきました。今回のプログラムを通して一回り成長できた自分を武器に、最終的な目標であるハンガリーでの就職を目指し、一歩一歩前に進んでいこうと思います。

きっと私のハンガリー中毒は、この先も治ることはないでしょう。

一年をふりかえて
越野 絵美

2008年の秋、長女を通わせたいと考えていたみどりの丘日本語補習校へ授業を見学に行きました。見学させてもらったのは、当時2年生のクラスでした。補習校といっても、ぼんやりとしたイメージしかありませんでしたが、実際見学してみたら、まだ1年半しか通っていない子供たちが、ひらがなどころでなく、先生が言ったことをノートにかいたり、漢字を書いたりしていることに驚かされました。あいうえおの「あ」の字もかけない娘が、ここへ通えば1年半でこんなことができるようになるのかしら?!と、やはり通わせたいと改めて思いました。

そしていよいよ2009年4月、娘はみどりの丘日本語補習校へ入学しました。同級生は幸運なことに8人もいて、しかもそのほとんどが小さい頃からよく一緒に遊んでいた、もしくは知っている子供たちでした。そんなこともあり、クラスに慣れるのは時間がかかりませんでした。宿題をこなすのが最初の1ヶ月から大変でした。なにしろ、当たり前ですが書くのも読むのもものすごく時間がかかり、今おもえばかわいそうなのに、イライラしたり、きつい言葉を言ったこともあり。そして、ひらがなってバランスをとるのが難しい字なんだなあ、ということも改めて気づかされました。そうこうしながらも、昼食後幼稚園から帰ってきたら、毎日宿題を一緒にしました。

8月には夏の大イベント、宿泊学習がありました。クラスの友達も一緒といえども、あまりよく知らないほかの学年のお兄さんお姉さんや、先生方だけのお泊り会。夜、先生から、「泣いているので、お迎えに来てください」と電話がくるかも、と覚悟していました。そんな私の予想に反してとても楽しい2日だった様で、迎えに行ったときは、帰りたくない和不機嫌でした。帰りの車の中では、みんなで一緒にカレーをつくりとてもおいしかったこと、宝さがしをしたこと、同じ部屋の友達が夜なきだったので、なぐさめてあげたことなど、いろいろ話してくれました。

そして9月、ハンガリーの小学校への入学。今までは幼稚園から帰ってきたら、毎日数十分でも日本語の勉強をすることができたのに、週に2~3回時間がとれるかどうかになりました。特にまだ学校に慣れないうちは、夕方帰ってきたらとても疲れていて、日本語も勉強しよう、という状態ではありませんでした。疲れていても

日本語の宿題をしなくてはいけない娘をかわいそうに思ったり、宿題をイヤイヤやっているのを見ているのが親として嫌になったり、両立は難しいのかな、と思った時期もありました。でも、宿題をするのは好きじゃないけれど、先生が大好きだし、友達と会うのも楽しみだから通いたい、という娘と、大変でも補習校へ通って勉強することはとても大切、というハンガリー人の夫と一緒に乗り越えました。

そして先月行われた学習発表会。毎年一度、一年間の成果を発表する会です。一年生は「さるかに合戦」の劇をしました。人前で演技をすることも初めての上、いろいろなセリフを覚えてやるのだろうか、と不安でしたが、限られた練習時間にもかかわらず、とてもかわいらしい素敵な劇を披露してくれました。他の学年の

みどりの丘日本語補習校

お兄さんお姉さんの発表をみたこと、みんなと一緒に日本語の歌をうたったことも、とてもよい経験になったと思います。親としても、ハンガリーの学校行事しか

しらない娘が、自分が小学生だったころの学芸会のような雰囲気の方に参加しているのをほほえましく、うれしく見せてもらいました。日本語のわからない義理の両親、夫にも、子供たちの一生懸命さや先生方の熱心さ、観客の方々の温かいまなざしが印象に残ったようでした。

こうやって振り返ってみると、あっという間の一年でしたが、楽しいことも大変なことも、いろいろあったなあ、と思います。娘にとって、月曜日から金曜日までのハンガリー語での勉強プラス土曜

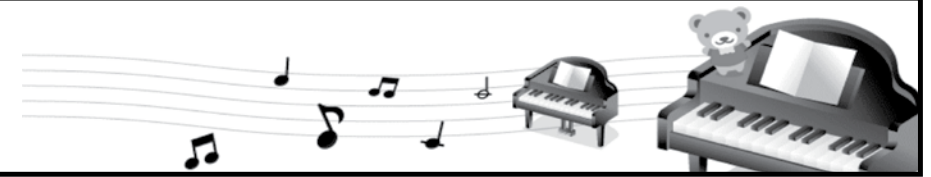
日の補習校は、疲れることも多々あったとおもいます。ほかの子供たちは、「明日から2日間は何もなくていい〜!」と喜んでるのに、娘は土曜日も朝はやおきして補習校。家族も、土曜日は補習校だから何も予定をいれられません。片道車で30分の送り迎えもあります。それでも一年間続けてこれたのは、グループで勉強する楽しさ、熱心で温かい先生の力があってのことだと思います。そして何より娘や同級生の

の成長に驚かされます。ほんの一年前は、日本語でなにも書けなかったのに、今ではひらがな、カタカナ、漢字も7~80字書くことができます。補習校へ通わず、娘と一対一での勉強では、とても無理だったと思います。自分と同じ環境の子供たちがいること、ハンガリー語と日本語だけでなく、他の言葉を話す子供もいること、そのような同級生と一緒に勉強し、ふれあうことで、娘の視野もこれからはもっともっと広がることでしょう。これからも、ハンガリーの学校との両立が大変になることもあるかと思いますが、大好きな先生と友達と一緒に楽しく通ってほしいと願っています。



コンサート情報

桑名 一恵



♪日本人留学生リスト音楽院卒業
ディプロマコンサート情報♪

今年度はフルタイムに在籍されているヴァイオリン3名、ピアノ1名、オーボエ1名の5名の皆さんが御卒業されます。すべて入場無料コンサートになっておりますので、ここで研鑽を積み重ねた皆さんの総まとめとしての素晴らしい舞台に皆様お誘いの上、是非、足をお運びください。

♪ 2010年4月15日(木) 15:30開演
リスト音楽院大ホール 入場無料
酒井 翔子(ヴァイオリン科/修士)
プログラム;
バッハ: 無伴奏ソナタ BWV1003より
グラーヴェ、フーガ
ヤナーチェク: ヴァイオリンソナタ
シベリウス: ヴァイオリン協奏曲
二短調 作品47
共演者: 島貫 愛(ピアノ)、トート・マリアンナ(ピアノ)



♪ 2010年5月7日(金) 15:30開演 リスト音楽院大ホール
門野 由奈 (ヴァイオリン科/学士)
プログラム;
バッハ: 無伴奏ヴァイオリンの為のソナタ
第1番 ト短調 BWV1001 Adagio-Fuga
シューマン: ヴァイオリンソナタ イ短調 op.105
モーツァルト: ヴァイオリン協奏曲 ト長調 KV. 216
サン・サーンス: 序奏とロンド・カプリチオーソ
共演者: 香川 真澄-ピアノ
リスト音楽院有志オーケストラ

♪ 2010年5月25日(火) 15:30開演 リスト音楽院大ホール
森垣 静香 (ヴァイオリン科/修士)
プログラム;
バッハ: 無伴奏ヴァイオリンのためのソナタ
第1番 ト短調 BWV1001 Adagio-Fuga
ベートーベン: ヴァイオリンソナタ
口短調
チャイコフスキー: ヴァイオリン協奏曲
二長調 Op.35
共演者: ベルトルディ・ティアゴ(ピアノ)
ソルノク交響楽団
指揮: ボイキ・ゾルターン



♪ 2010年6月3日(火) 15:30開演(予定)
旧リスト音楽院室内楽ホール
佐田 めいこ (オーボエ科、学士)
曲目: プーランク: オーボエとファゴットとピアノの為のトリオ
その他……

推薦コンサート

♪ 2010年4月30日(金) PM7:00
岩瀬 塔子 フルート リサイタル
場所: Pintér Aukciósház
(1055 Budapest Falk Miksa u. 10.)
曲目: C.P.E. バッハ: ハンブルガーソナタ
プーランク: フルートソナタ
ダマーズ: 演奏会用ソナタ
ピアソラ: タンゴエチュードより
ビエルネ: 室内ソナタ
共演者: 石本裕子(ピアノ)、星野智也(チェロ)
チケット: 2000 Ft (学生: 1000 Ft)
お問い合わせ: +36-20-328-0257 t.k_music@t-online.hu



※今回掲載されませんでしたコンサート情報やコンサート当日までに変更があった場合は、こちらのHPで最新情報が掲載されますので、チェックしていただければと思います。それ以外にも日常的な情報が情報募集・掲載されています。<http://propart.client.jp/BudapestNetwork/main.html> (桑名)

留学生交流情報

最近、日本人留学生や在留者と、日本語を学んだり日本に関心のある方々がコミュニティーサークルを立ちあげ、交流の一つとして活動をされています。是非参加されてください。

日本ハンガリー会話サークルというのは日本語を勉強しているハンガリー人とハンガリーに住んでいる日本人が集まるサークルです。毎週火曜日に金曜日に、お互いにさまざまなトピックについて自由に話すことになっています。金曜日のサークルの後はたまにイベントもしています。Facebookにもグループがあって、そこで毎回、次のサークルのお知らせをしています。参加したい人は、お手数ですがendre86@gmail.comにメールをください。(それでFacebookのグループに入れます。)Facebookを持っていない人にはメールで連絡します。皆さんと一緒に楽しく話しましょう。
火曜日 時間: 17時30分~19時30分
場所: カーロリ大学3階305号室
金曜日 時間: 18時~19時30分
場所: ELTE大学(アストリア・キャンパス)B棟242
担当者 オキ

金子三勇士君コンサートの感想

1)PIANO留学生

Q:コンサートはどうでしたか

A:三勇士さんの技術や音色は、本当に素晴らしくてとても引き込まれるものを持ってると思ったのですがいかにせん、オケがバラバラだったので、それに必死に彼が合わせている感じが全面に押し出されていてとってもしんどいと思いましたが、でも彼のテクニックや歌い方、音色ひとつひとつの完成度は素晴らしいなと思いました。とにかく音色がキラキラしていて、嫌みのない演奏だなと思いました。

Q:同じピアニストからみてどうでしたか。

いい意味でくせがない感じでした。あのきれいなピアノの音色は私には出せないなと思いました。もし課題があるのなら、まだやはり若いのもあって、これに円熟味が増すと怖いものないんじゃないかな!って思います。

2)5歳の次男と友だち親子で行ってきました。普段はなかなか時間もとれずコンサート行けない時が多いのですが、今回は、そこは飛ばして見てしまっていました。子供と一緒にいったもので寝てもいいや、退屈したら途中で出ればいよと思ったら 気が楽になり。。結局息子は寝ずに最後まで聴いておりました。

もしこのメッセージを金子三勇士さんへ伝えていただけるなら嬉しき限りです。

10年前ヴァーツ行きの電車で 偶然隣り合わせとなり 話しが弾みお姉さんの写真を見せてもらったり家族や音楽の事など聞いた記憶があります。メールでコンサートの誘いを受けましたが、日本帰国で行けずに、そのままになってしまいました。以前パプリカ通信に 彼の記事と写真がのった時 当時のまるまるとした人懐っこい彼の面影を思い、今の活躍をととても嬉しく感じ、彼のコンサートがある時は是非足を運ぼうと決めていまし

た。すばらしき音色が心に響きに惹きつけられました。オーケストラとの競演を短期間で合わせるのなかなか難しいと思われるのに、とても一体となっていました。時間的に演奏時間が短かったのが非常に残念でした。5歳の次男も音楽大好きで、三勇士さんの名前を覚え聴き入っていたようです。息子とも、あまりゆっくり時間がとれないこの頃リラックスした心地よい時間を共有出来ました。

三勇士さんは、昔の事でもう記憶にないかもしれませんが、再び成長した彼を見る事が出来、がんばっている姿が観れて感激しております。これからも応援しています。今度は是非ソロの演奏が聴きたいです。

私は2007年からハンガリーに住み、今は二児の母です。7歳の長男も地元小学校の音楽クラスで勉強中です。去年の9月から日本語教師に復活して、高校で約80名の生徒に教えています。

また コンサートでお目にかかれるのをのを楽しみにしております。 F.I.

コチシュ・ゾルタンのアドバイスをうける金子三勇士君



昨年、第3回バルトーク国際ピアノコンクールで優勝した金子君の最後のコンクール副賞コンサート(セグド・オーケストラとの共演)が、3月10日、芸術宮殿で開催された。

Japan Coop Kft.: 1025 Bp,Cimbalom u. 7.
Tel.:345-0450 Fax: 345-0008
e-mail: paprika-tsushin@jpc.hu
ホームページ: www.paprika-tsushin.hu/

登録は無料ですのでE-Mailにてお申し込みください。



編集部よりのお知らせ

ドナウの四季

「ドナウの四季」のHPが完成しました。これまで掲載されたすべての原稿を読むことができます。<http://www.danube4seasons.com>

皆様の原稿をお待ちしています。エッセイ、ハンガリー履歴書、自己紹介、サークル紹介などの記事をお寄せください。提出いただいた原稿は、紙面統一の編集のために修正することがあります。修正した原稿は執筆者の校正をお願いしています。

原稿は電子ファイルで、morita.magyar@gmail.comへお送りください。Word文書あるいは一太郎文書をお願いします。EXCEL形式での提出はお控えください。写真および図形は別ファイルで送付ください。

2大ヴァイオリニストの新たな挑戦
篠崎 マロ 史紀 & セルメチ・ヤーノシュ
スペシャル・プレゼンツ ジプシーコンサート
2010年6月8日(火)19:30開演
ハンガリー文化会館 ラーコーツィホール
Magyar Kultúra Alapítvány Rákóczi terem (Budapest, I. Szentháromság tér 6.)



プログラム:
ブラームス:ハンガリー舞曲より1.4.5.6.7番
モンティ:チャルダッシュ
リスト:ハンガリー狂詩曲
その他...

共演者:
ビオラ:レントー・デジュ
コントラバス:ベルキ・ヴィルモシュ
ツインバロム:キシユ・ジュラ

チケット料:一般 3,000HUF / 学生・退職者 2,000HUF

チケットお取り扱い・お問い合わせ: ※開演1時間前より会場でもご購入いただけます。
Propart Hungary Bt. (日本語可) <http://propart.client.jp/>
Tel&SMS :06-70-3815548 / E-mail: propart@chello.hu
ハンガリー文化会館/Magyar Kultúra Alapítvány
Tel.: (36-1) 224-8100, fax: +36-1-375-1886 www.mka.hu / E-mail: mka@mail.datanet.hu

主催: Propart Hungary Bt 協力:ハンガリー文化会館(MKA)・ANA

インターネットで人生の楽しさを広げましょう! オトナももっと遊ぶ時代

人生に夢と輝きを BYOOL SNS ~The Best Years Of Our Lives~

BYOOL SNS (Social Networking Service)は、大人が楽しめるユーザー参加型のWEBサイトです。スマートな大人が集まるグローバルな知的空間を目指しています。現在、10ヶ国の海外に住む日本人が参加しており、国を超えて、文化や政治・経済始め、幅広い分野において、情報発信、議論を行なっています。あなたの知的好奇心を満たしてみませんか?

★参加方法:事務局まで参加希望の旨、メールをお願いします。
招待メールをお送りします。

BYOOL事務局 Email: admin@byool.com 「BYOOL Bloggers」 <http://www.byool.com>

★お問い合わせ:上記事務局アドレスまでお問い合わせください。

書き込みはすべて非公開にできますので、スケジュール管理や、何か自分の記録をつけたり、コミュニティをグループの連絡用に使っていらっしゃるメンバーもいます。

BYOOL Selection

BYOOLでは、品質にこだわり抜いた無農薬・有機栽培の緑茶知覧茶・有機緑茶と、コクのある味わいの知覧茶・深むし茶を皆様にご紹介しております。

国内でも有数のお茶の産地として知られる鹿児島県知覧町の、全国茶品評会などのコンクールで、上位入賞経験を持つお茶園から、直接取り寄せました。環境に優しく、そして、人に優しいお茶で、心落ち着かず優雅なひとときをお過ごしください。

BYOOL Selection: <http://byool.open365.jp/>

日記・エッセイ



自分のページを持って。日記、エッセイ、ブログ、記録として。

コミュニティ



同じ興味・関心を持つ仲間の交流の場。OB/OG会にも。

豊かさ・輝き



様々な人の意見・情報のシェア、そこから生まれる新しい発見や気づき、人生を豊かに輝かせるものに。

安心・安全



無料会員制。SNSのメンバーだけが利用できるクローズドなサービスなので、安心安全。

2008年公開、映画「おくりびと」テーマ曲担当。東京都交響楽団首席チェロ奏者

古川 展生 チェロコンサート

Furukawa Nobuo

2010年6月16日(水) 19:30開演

聖ミハイイ教会 (1056. Budapest, Váci utca 47/b)

プログラム:

ジョヴァンニ・ソツリマ: アローン
ハイドン: チェロ協奏曲第1番
その他...

共演: ソルノク市立交響楽団
指揮: 井崎正浩



チケット料:

一般 / 2,500 HUF

学生・退職者 / 1,500 HUF

※2010年6月14日(月) 19:30開演 Aba-Nova文化会館(ソルノク市)で
ソルノク市立交響楽団演奏会にソリストとして出演いたします。
詳しくは、tel.56/514-569 111 info@szolnokiszimfonikusok.hu

チケット取り扱い: 当日、会場にて開演1時間前より当日券のご購入が可能です。

☎ Propart Hungary Bt. (日本語可)

Tel&SMS: 06-70-3815548, E-mail: propart@chello.hu

☎ 聖ミハイイ教会

1056. Budapest, Váci utca 47/b. Tel: 1-337-8116

主催: NPO法人リスト音楽院友の会 協力: Propart Hungary Bt., ソルノク市立交響楽団

さくら
DESIGN

CI、広告、ロゴ、ホームページ等
名刺1枚からご希望の言語にて
デザイン致します。

各種パッケージ、
インテリアのデザイン、
内装工事、翻訳から印刷まで
幅広く受け承っております。
お気軽にお問い合わせ下さい。



SAKURA DESIGN:

info@innerdesign.hu

Inner Design Group

1021 Budapest, Bognár utca 7.

Tel/Fax: 1-200 3213

Mobile: 06 20 480 4431

www.innerdesign.hu

Propart Hungary Bt.

各種コンサート企画・製作・国際交流イベントを中心とした業務の運営。ハンガリーを拠点にグローバルな企画・マネージメント展開を行っています。お気軽に、御相談下さい。

- ・音楽企画/マネージメント
- ・若手音楽家の育成サポート
- ・国際交流事業企画運営
- ・留学/音楽研修サポート
- ・短/長期賃貸物件仲介
- ・各種通訳
- ・翻訳サポート
- ・買い/レンタルピアノ仲介
- ・輸入/輸出楽器仲介

ハンガリー国内出張演奏、
各楽器講師紹介なども随時承っています。

Propart Hungary Bt.

Address: 1089 Budapest, Kóris utca 25. II/6

Tel&Fax: +36-1-786-7846

Mobil: +36-70-3815548

e-mail: propart@chello.hu

web: http://propart.client.jp/

Propart